

河出書房新社

上

第十二卷

見知らぬ橋
船山敬香
小説全集

船山馨小説全集 第十一卷

昭和五十年八月十日 初版印刷

昭和五十年八月十五日 初版発行

著 者 船山 馨

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京) 一〇八〇二 電話二九一一三七一

印刷 享有堂印刷

製本 小高製本

©1975 KAORU FUNAYAMA

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

見知らぬ橋上
5

装幀

佐野繁次郎

船山馨小説全集 第十一卷

見知らぬ橋

上

機内からひと足タラップを降りかけると、いきなり、細かい硬質の雪片が、肌を刺す風にのって、横なぐりに頬を叩いた。

鉛色の空の下に平野が拡がり、眼の前に空港のビルだけが、凍えたように孤立していたが、それも風まじりの降雪に遮切られて、古いフィルムのような眺めのように不鮮明であった。

手すりに掴まっていたながら、恒秋は風に重心をとられそうになつて、タラップの途中でよろめいた。

「氣をつけて、お父さん……」

名緒子が背後から、彼の瘦せた軀を支えた。

「さすがに北の果やな……」

足もとに視線を落したまま眩きながら、恒秋は慎重にひと足ずつ立ちどまるような緩慢さで、薄氷の張った飛行場へ降り立った。二人の後につづいてくる客たちの苛ら立ちを、名緒子は背中に感じていた。

大阪から羽田で便を乗り継いで、仙台の上空あたりまで

は好天に恵まれて、飛行機が初めての恒秋も、案じたほどのことはなく、小窓からの風景に見とれたりしていたが、それから気流が悪くなった。津軽海峡を越えるころから、彼は気分が悪くなつて、血の気の引いた顔に膏汗を浮かせて口をきかなくなつた。それが尾を引いていて、まだ足もとが定まらないようであつた。

降りたのは先頭に近かつたのに、薄氷に足をとられないように恒秋をかばいながら、用心して歩いているので、空港ビルの入口へ辿り着いたときには、二人だけがほかの乗客から、かなり遅れてしまつていた。

「京都の魚住さんでしょうか」

扉を入つたすぐのところに、ホテル・キャッスルと染め抜いた、赤い小旗を掲げて立つていた蝶ネクタイの青年が、慇懃に声をかけてきた。

名緒子がそうだと答えると、青年は彼女の手からスーツ・ケースを受取つて、

「社長の言いつけで、お迎えにあがりました。社長もホテルのほうでお待ち申しております」

と、先に立つて待合室の人混みを縫いながら、空港の玄関へ出ていった。そこに車が待つていた。

「こんな吹き降りのなかを、お手数をかけまして、えろろ濟まんことで……」

走り出した車のなかで、恒秋はあらためて助手席の青年の背中に頭を下げた。

「けど、出来ましたら、すぐ日向さんのお邸のほうへ伺いたいのですが……。早よう面を拜見させていただきとう思いますのどすけど……」

「それもホテルのほうに用意してあるそうです」

青年はバック・ミラーのなかで、眼に職業的な微笑を含んだ。手のすいたフロント係かなにかだろうと、名緒子は思った。

「いいときにお着きになりました。この後の便は欠航だそうですね」

クリナーがフロント・ガラスに掃く扇型の視界に眼をあてたままで、青年が言った。

「北海道はお初めてですか」

「私は高校の修学旅行で、札幌まで来たことがいち度だけありますけれど、もう十年近くも前のことですし、父は今度が初めてです」

と、名緒子が恒秋にかわって答えた。

六十二になる恒秋は、この数年めつきり体が弱って来ていた。胃がわるいのは若いころからであったが、近年になって、とくに足腰の衰えが眼立つようになったのは、なんといっても、いちじじゅう坐りきりで能面を彫る仕事を、四十余年の余もつづけて来たせいであった。今度キャッスル・ホテルの日向社長から招かれたときも、名緒子は恒秋の健康を気遣う思いが先に立った。日向が往復の飛行機の手配をしてくれるとはいっても、やはり京都から札幌まで

は、恒秋には遠すぎた。そのうえ、二月半ばの酷寒期でもある。お断わりしたら、と名緒子は言ったが、彼はきかなかった。

日向修三は道内の眼星しい観光地を網羅するキャッスル・チェーンのホテルの社長であるばかりでなく、全国でも屈指の炭鉱経営者であり、汽船会社やバス会社も持っていて、中央の財界でも名前が通っていたが、能の愛好者で、能面の蒐集家としても著名であった。

その彼が恒秋を名指しで、秘蔵の面の写しを打ってほしいと注文して来たのに、恒秋は抑えがたい魅力を感じたようであった。しかも、写すのは女面のなかのへ孫次郎〜だという。日向の秘蔵しているへ孫次郎〜は、専門家のあいだで、いわゆる中作と呼ばれる、桃山期の逸品として定評があった。

能面打なら、誰しも心をそそられずにはいられない仕事であったが、まして恒秋は女面を得意としている。名緒子とめたくらいで、いったん火のついた彼の制作意欲が薄れるはずはなかった。そのことは、子供のころから恒秋のきびしい指導で、彼女自身もかなり水準の高い面を打つようになっているだけに、名緒子には一層よく理解できた。

結局、日向の許しを得て、彼女が介添役で蹤いて来るしかなかったのだが、それにしても、千歳に着くなりこの荒天では、やはり、恒秋には柔な旅ではなかったと、一抹の後悔に似た思いが、名緒子の心をかすめていた。

車は緩やかなうねりをもった、広い原野のなかの道を走りつづけた。何度か道の両側に、小さな町なみがひらけ、そしてそれを走りぬけるたびに、また、道は新たな原野と丘陵のうねりを辿った。

だが、それも名緒子の坐っている側からは、なにも見えなかった。吹きつける雪に覆われて、窓硝子が白い闇になっていた。札幌の街へ入るまで、一時間余りかかった。

ホテルへ着くと、社長室へ案内される前に、恒秋はひとまず用意されてあった部屋へ入って袴をつけ直し、名緒子にも化粧を直させた。口下手なうえに無愛想なので、どうかすると誤解を受けるようなこともあったが、その実、彼は融通のきかない律儀な性格でもあった。

社長室には半白の頭髮を短かめに整えた、肩幅の広いがっしりした軀つきの老紳士と、三十を一つ二つ越したかと思われる無で肩の、ほっそりした青年がいた。眼鏡の奥の、細い一重の眼にいくぶん女性的に感じられるほど柔和な光があった。

「やあ、遠路のところを御苦労でした。日向です。あいにくの天気で、お疲れでしたらう」

老紳士のほうが広い事務机から立って来て、気軽に手をさしのべると、二人をゆったりした卓張りのソファに迎え入れた。そうして、恒秋と名緒子の挨拶を受けてから、青年のほうに眼をやって、

「仲の隆吉です」

と言った。

「よくいらっしやいました」

青年は口もとに静かな微笑を^{うか}泛べた。

「お嬢さんも面を打たれるそうですな」

珈琲を運んできたメイドが退ると、日向は興味ありげに名緒子を見つめるようにした。名緒子は当惑して、恥らしいのにじんだ視線を伏せた。

「真似ごとだけはいたしますけれど、打つなんて、とても……」

「半人前の未熟者です」

ニベもない言い方を、恒秋はした。

「素人がたに手ほどきをするくらいが関の山で、玄人としてはとても通用せえしまへん」

「それにしても御婦人が、しかも若いのに面をお打ちになるとは珍らしい。素人衆に教えたりもなさるのですか」
「熟のようなことをやっています。近頃は装飾品として、いい加減な面の需要もあるようで、趣味と実益をかねて、習いたいという物好きなお人もありますよってにな……」

恒秋の声には、触れたくないことを口にしてしている苦い不機嫌が覗いていた。

「そんなことより、早速ですが御秘蔵の孫次郎を拝見させていただきますだけしまへんやるか」

「どうぞ、どうぞ。そのためにお出ねだったのですから

日向は愛想よく言つて、隆吉に顎をしやくつた。

「ほんとうはお手元にお預けするといひんだが、そもい
かんで、そのかわり一週間でも十日でも、得心のゆくま
で御覧になっていただきましょう」

隆吉が事務机の上から運んできた桐箱を受取つて、卓子
のうゑに置きながら言う日向に、恒秋は無言で頷いた。

能面の制作は、昔からすべて本面の模刻である。様式も
精神も、精密に本面のそれを踏襲し切らなければならな
い。しかし、能楽五流の家に秘藏されている本面でも愛
好家の所藏品でも、借出して手元に置きながら写すとい
うことは、まず望めないことであつた。

日向はホテルに滞在するあいだは、面を恒秋の手もとに
置いていいという。納得のいくまで面と起居をとものにでき
るだけでも、滅多にはない幸運と言わなければならなかつ
た。

恒秋は桐箱の打紐を解き、蓋をとつて、年代物の袋に包
まれて納められている面に向つて一礼してから、面を袋か
ら取り出した。

傍らから名緒子も眼を吸われた。それは想像していた以
上の逸品であつた。

へ孫次郎のの本面には有名な挿話がある。

孫次郎というのは、本来は室町期の金剛流中興の祖と言
われる金剛氏正の子、孫次郎久次のことだが、面は彼の妻
の面影を伝えたものだと言われている。彼は夭逝した美貌

の愛妻を忘れることができず、その生前の風貌を面に写し
て、生涯愛用したという。

永禄七年（一五六四年）には、孫次郎久次も妻のあとを慕
うように、二十七歳の若さで病没したが、へおもかげと
名づけられたその本面は、現在もなお、能面蒐集家として
著名な、東京の三井八郎右衛門邸の奥深くに秘藏されてい
る。

名緒子もいち度だけではあつたが、恒秋とともに、京都
の美術館に出陳中の本面を観たことがあつて、深い静謐の
なかに凝縮しているその艶麗さは、いまでも心に焼きつけら
れていた。だが、眼の前のへ孫次郎も、ほとんど本面と
遜色がなかつた。彫りも、肉のせも、毛描きも、どこに一
点の隙もなかつた。

恒秋は面の裏を返した。古色の深い木肌に、かすかに銘
の澤のあとが消え残っていたが、彼の視力では判読できな
かつた。彼は面の耳を両手で捧げるようにして、名緒子の
前にさしのべた。

「天正二……でしようか。でも、七とも読めるようどす
な」

あとは彼女にも読みとれなかつた。というより、字が木
肌の暗い古色のなかに消えてしまつていた。

恒秋は頷いただけで、また面の表を返して憑かれたよう
に見入つた。

天正七年としても、孫次郎の死から十五年目である。本

面の成立から、いくらの歳月も経っていない時期の作だということになる。また作風、古色、肉づけの剝脱した耳の部分に、覗いている漆地などからも、それは裏づけられていた。素材が檜でなく、桐なのも珍らしかった。

「いかがです」

いつまでも面を凝視したままの恒秋に、いくらかしびれを切らしたように、日向が声をかけた。こういう場合の蒐集家にありがちな、無邪気な得意を包みきれない声の色であった。

恒秋は短かい溜息を洩らした。

「これほどの孫次郎を見せていただけたのは、本面以来です」

「期日も費用も、いくらかかっても結構です。ひとつ会心のものを打っていただきましょう」

「へえ、面打の冥利です」

と、恒秋はなおも「孫次郎」を手から離さなかった。

名緒子は恒秋が面を置くのを待って、さまざまな角度から「孫次郎」をカメラに納めた。恒秋ではどうしてもピン트가甘くなるので、写真撮影はいつも彼女の受持であった。それが終ると、恒秋はまた面を手にとった。

「どうです。階下へ行つて、すこし話しませんか」

隆吉が気を利かせて誘ってくれたので、名緒子は日向に会釈をして席を立った。いったん気に入った面と向いあうと、恒秋は際限がなかった。

一階へ降りると、隆吉はさきに立ってロビーの横のカクテル・ラウンジへ入ってゆき、二人は通りに面した広い窓際の卓子に向いあった。

「あなたの前で申訳ないんですが、僕は能とか能面とかは、まるでわかりませんのでね」

と、隆吉は白い歯を覗かせた。

「私もですわ。打つ真似事はしていますけれど……」

「でも、あなたはお父さんの仕事を継がれるんじゃないのですか」

「いいえ。私もそんなつもりはありませんし、父も許しませんわ。お前は面じゃ^{おもて}ない、土産物屋の安人形とおなじだなどと、いつも叱られ通しなんですもの」

窓の外はほんものの吹雪になっていた。車は視界が利かなくなつて、ライトを点けて這うような緩慢さで走っていた。

「それに、能面打なんて仕事は、よくよく好きで凝りかたまった、父のような者でなければ、とてもつづけてゆかれはしません」

名緒子は吹雪の街なみから視線を返して、唇に微笑を含んだ。

「そうかもしれませんね。割にあわんお仕事のようだから……」

「そうです。作ること自体が生甲斐でなければ、とても……」

室内裝飾や外人觀光客の土産用に、デパートの美術品部あたりから持込まれるような仕事を引受けるつもりなら別だが、もともと能面の需要は、いたって少ないうえに、たいていの能面打が十日もあれば仕上げる仕事に、恒秋は三月も四月も、ときには半年あまりもかけなければ気がすまない。そんなにして出来あがっても、彼の場合、納め値はよくて一面十万円前後である。

だから、名緒子が恒秋の反対を押切つて、趣味のある素人を集めて面打の技法を教えているのは、そうでもしなければ暮してゆけないからであった。

恒秋もいち時、彼女を自分の後継者にと、真剣に考えていた時期があったらしいが、いまでは諦めている様子であった。

器用な者なら、一年もすれば土産用の面くらいは打てるようになる。それが目当てで集まって来る素人を相手にして、それらしい見てくれだけの技術を教えたりするようになつては、もう本当の能面は打てないと、恒秋は娘への望みを絶つたのであらう。

名緒子のほうは、もともと自分から好きで面をいじりはじめたのではなかった。

子供のころから仕事場で、こまこました手伝いをさせられていたうちに、材質の下処理や鑿の使い方、彩色の手順なども自然に覚えた。恒秋が本腰を入れて指導しはじめたのは、彼女が高校へ入ってからであったが、もうそのころ

には、名緒子は恒秋にとって、かけがえのない助手になっていた。

それ以来、二十七歳の今日まで、恒秋の仕事の世話をやきながら、自分も鑿をとってきたのだから、面を打つことが嫌いなわけではない。しかし、自分がいつの間にか、恒秋にとってなくてはならない存在になってしまったことが、彼女の人生を釘づけにしている感じのほうが深かった。

「あなたはお父様と御一緒にお仕事をしていらっしやいますの」

「いや。僕は物理屋です」

「物理屋？」

「大学の研究室で、雪氷物理学という、へんなものをやっているんです。好きでなければやれませんが、割に合わない点でも、あなたのお父さんと似たり寄ったりかな」

隆吉は煙草の煙りのなかで、眼を細めて笑った。

名緒子は彼を見つめた。雪氷物理学などいうのも初耳で、どんな学問なのかわからなかったが、それよりも、隆吉が地味な研究者だということが、彼女には思いがけなかった。

「どんなことをなさるんですの。雪氷物理って……」

「簡単に言えば、僕の場合は氷を使って、物体の力学的な法則と性格を調べるわけです。はやい話が、石も固体だし氷も固体でしょう。ですが、氷は液体が凍結して固体にな

ったものですから、分解もできれば、さらに硬度を高めることもできる。こういう固体は氷だけで、そこが研究のつけ目でしょうね。やってみると、結構面白いものですよ。氷ってやつは……」

「私なんかにはよくわかりませんけれど、能面を打つのと似たところがあると仰有るの、なんですか、感じだけは頷けるような気がしますわ。きっと、隆吉さんは氷がお好きなのね」

「そうも言えるかもしれませんがね。ただ、僕の場合は研究の対象としての話ですが、世の中にはおかしい人間もいますね、研究者でもないし、なんの目的もないのに、ただ、やみくもに氷が好きでたまらないという男もいるんだから、案外、人を虜にするへんな魅力があるのかもしれない」

隆吉は面白そうに言って珈琲を口に運んだ。

「僕の知っている男に、一人そういうのがいますが、この男などは、それこそ氷に憑かれたとでもいうしかありませんね。並河ながわといって、東京の製紙会社に勤めている、雪や氷とはなんの関係もなさそうな男なんですがね」

名緒子の頬に、ふいに緊張が走った。

「その方、並河なんと仰有いますの」

「五郎です。並河五郎」

隆吉は珈琲茶碗に眼を落していたので、彼女の表情の束の間の変化に気がつかなかった。

「三年ほど前でしたかな。突然、大学の研究所へやって来て、南極の氷を見せてくれと言いましてね。うちの大学の学術調査隊が、南極から帰って間もなくで、向うの氷を持ってきたのを、新聞かなにかで知ったんですね。零下二十五度の低温室で一時間ちかくも、偏光板にかけた氷の薄片を覗き込んだきり、動かないんです。つきあっている僕のほうが閉口しました」

と、隆吉は低く声に出して笑った。

防寒服を着てはいても、零下二十五度の密室で、一時間ちかくものあいだ、この見学者の旺盛な好奇心が満足するのを待つのは、辛抱のいることだったにちがいない。しかし、それは隆吉にとって、不愉快な記憶ではないようであった。

「もっとも、ひと口に氷といっても、淡水と海水でもちがいますし、凍結の条件や過程で、結晶は千差万別で、偏光板で見る氷の結晶は、色彩がじつに美しいんですよ。彼でなくても、ちょっととりさせられますね。どうですか、名緒子さんいち度研究所へいらっしゃいませんか」

「はあ……」

曖昧に頷きはしたものの、名緒子はべつの思いにとらわれていた。

「その方は……並河さんは、やはり氷の研究をなさっていらっしゃいますの」

「それが、ただ氷が好きだというだけなだから、変って

いますよ。ただそれだけのために、暇をみては氷のある場所を歩きまわっているらしいんですね。いまも網走^{網走}へ行っています」

「網走へ……」

名緒子は軽く息を吞んで語尾を消した。なにか遠くを見つめるような輝きが、眸の奥に泛んできていた。

「いま、あそこは流氷期ですからね。二、三日前の観測では、オホーツク海の沖合三十キロあたりまで結氷しているそうです」

隆吉はそう言って、新しい煙草に火をつけた。

「あそこに、うちの大学の流氷観測所があるんですが、昨日、並河君がひょっこりやって来て、網走へ行くと言うんで、観測所の僕の同僚に紹介状を持たせてやったばかりなんです」

「どのくらい時間がかかるんでしょう。ここからですと……」

「どのくらいって、網走までですか」

名緒子が頷くのを見て、はじめて隆吉の眼に怪訝な表情が泛んだ。

「特急で六時間です。もっとも特急は一本しかありませんが……」

彼は言葉を切って、名緒子を見つめた。

「名緒子さんは、並河君をご存じなのですか」

「存じあげているというほどではありませんけれど……」

名緒子はそっと隆吉の視線をかわして、襟に頸を埋めた。

「その方が帝京製紙の並河さんと仰有るのですしたら、いち度、信州の山でお目にかかったことがあるものですから」

「その並河君ですよ。そうですか……」

と、隆吉は眼をみはるようになった。

「あなたは山もおやりになるんですか」

「私のは山登りのためではないんです。父がおもに木曾や尾州の檜を使うものですから、その地方の山にいい檜があると耳にしますと、ごく稀れにですけど、見に出かけたりのもいたしますの。並河さんはよく山をお歩きになるそうですわね」

「彼はそれが仕事のようなものでしょう。パルプ用木材の材質調査かなんかを、やっているらしいですからね。氷の話をしてませんでしたか」

「いいえ、なにも。ですから、いまお話を伺っていても、あの並河さんなのかしらって、半信半疑のような気もいたしますの」

「夏のあいだ、日本では自然結氷が見られないでしょう。」

すると、彼は我慢しきれなくなつて、立山連峰の山崎カールあたりへ出かけるんだそうです。あそこは氷食地形といって、大昔の氷河期に、氷河の移動で削りとられて出来た谷なんです。つまり、彼は氷がなくなると、氷の爪跡でも見て、心の渴きを慰めないではいられないらしいのです。